

わが^{おも}恋う人は

遠藤周作

講談社

わか

おも

恋う

人は

遠藤周作

わが恋^{おも}う人は

昭和六十二年二月二十日 第一刷発行
昭和六十二年三月二十五日 第二刷発行

著者——遠藤周作

© Syusaku Endo 1987, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

波紋	不吉な夜	わが恋う人は……	失心	手がかり	予知能力	探しびと	心の穴	初秋
169	149	131	110	89	71	46	24	7

終末

381

破局

360

誘惑

344

薄氷

324

荒魂

303

砧

282

綱わたり

266

暗転

212

恋の流れ

189

装、装
幀画
山 中
崎 原
登 脩

わが恋^{おも}う人は

初秋

東京はまだ残暑がきびしかったが、初秋の軽井沢の夕暮は霧雨がふっていて、夏姿では寒いくらいだった。

万平ホテルまでのタクシーのなかで、

「こちらは、ずっと雨ですの」

と美子^{むすこ}がたずねると、土地者らしい中年の運転手は、

「いや、昨日まではそりゃ天気がよかったですよ、浅間山がはっきり見えましたがな。お客さん、運が悪いですねえ。テニスですか」

「いいえ。仕事……」

初秋
「今は東京の人は、ここでゴルフかテニスですもんねえ。農家も畠をつぶして、コートつきの民宿をやったほうが儲かると言ってます」

とたずねもしないことをべらべらと語ってくれた。

東京の盛り場と変りのないほど照明の明るい通りをすぎて別荘地帯に入ると、さすがにそこは暗く静かで、落葉松の林を通して別荘の灯が霧雨ににじんでみえた。

一軒の別荘の食堂で、家族が大きな食卓について談笑している光景がちらと眼にうつった。

その瞬間、美子は何ともいえぬ幸福のイメージをその光景に想像して、羨しさにかられた。

(いいな。わたくしもやっぱりお嫁に行こうかしら)

いつものことながら、まだ社会で働きたいという気持と家庭を持とうかという気持とに板ばさみになった。

それを追ひ払うために美子は額を車の窓にあて、眼を大きく開いた。そしてタクシーは万平ホテルの門から車よせにすべりこんだ。

ウィークデイで雨のせいか、フロントのあたりは深閑としている。タイプを叩いていた黒服の係りも、

「承っております」

といって、すぐに部屋の鍵をわたしてくれた。

三階の部屋に入るとバスの湯を入れ、その音をききながら手帖を出して、作家の斎藤公明の別荘に電話をいれた。

「白樺編集部の秋月でございますが……。お願い致しておりますした原稿を頂戴にあがりました」

受話器に出てきた斎藤氏は少し酔った声で、

「ちょうどいい。八時に来てください。ハウス・ナンバーを運転手に言えば、そのまま連れてきてくれます。先客があるがね……」

と言った。

時計をみると六時を一寸すぎていた。八時まであと二時間ある。バスに入って体をあたためることにした。湯のなかで若い肉体をながめ彼女はある寂しさを感じた。結婚してもいいな、と思った。

入浴のあと身支度を整えて食堂におりた。家族らしい客が二組、ゴルフ客のグループが三組、そのあいだにまじって一人でスーブを口に運んだ。

大学を出て出版社に勤めてから四年目になる。

入社当初は一人だちで仕事をやる悦びや、仕事の関係で今までは会えないような各界の人たちを見られるのが楽しみだった。

そのうち、それに馴れてくると、会社での男女差別が気になったり、男性に負けまいという気概から仕事に精を出すようになった。結婚など当分、おあずけという気持だった。

それがこの頃、ぐらついてきたのが本音である。

大学時代の仲間で、結婚してもう子供が二人もいる女友だちがいる。

「わたしは美子のように頭がよくないものね」

と彼女は自分の一生はよき妻、よき母になることだと学生時代から言っていた。

そんな友人の倅せな姿をみると、

(やっばり、何とか、かんとか言っても女って結婚するのが一番、幸福なのかしら)

と今までの張りつめていた気持が動揺する近頃だった。

珈琲をゆっくり飲んで腕時計をみると七時二十分だった。

フロントでまだ働いているさっきの係りに車をたのんだ。外は霧が深くなったらしい。

斎藤公明氏の別荘は軽井沢と中軽井沢とのちょうど間にあって、車から外に出ると黒い建物のサロンから洩れる光が流れる霧を浮かびあがらせていた。

サロンの入口が玄関になっていて、なかで和服姿の斎藤氏が誰かと話をしているのが見えた。

「やあ、わかりましたか」

と腕ぐみをほどこいて斎藤氏は大きな籐椅子から立ちあがった。サロンのなかは同じような籐椅子が幾つも乱雑に並べられていたが、その乱雑さがかえって作家の山荘らしい自由な雰囲気を作りだしている。

「今日は寒いので、もう暖炉に火をつけているのです」

なるほど、暖炉には生きもののような炎が動いていた。

「こちらは実業家の小西君」

とこの家の主人は三十四、五歳ぐらいの先客を美子に紹介した。その客はゴルフでもしてきたのか陽にやけて、髪が黒かった。うすいスウェーターをスポーツ・シャツの上に着ている。

「ぼくの絵友だちでしてね、同じグループに入ってパステル画をやっています。今日も雨中、雨のなかを絵を描きに出かけたくらいだ」

「秋月美子と申します」

彼女はハンドバッグから会社の名刺を出して小西にわたした。

近くの村から手伝いに来ていという老婆が、コップやチーズをならべた皿や、それから野沢菜をいっぱい運んできた。

「君、飲んでしょ」

と斎藤氏が美子にたずねた。

「はい」

「さむいから強い酒がいいかな、それともお嬢さんだからウォッカは無理かな」

「頂きます」

「そりゃたのもしい。近頃の娘さんは開放的だからいい。ところでこの小西君の先祖は誰かわかるかい。秀吉の家臣で、堺の商人の件せがれから九州の宇土の大名になった小西行長だよ。君も知っての通り、ぼくは今、小西行長の生きかたに興味を持って、その伝記を準備しているものだからね、なにしろ資料に乏しい人物だから、子孫の彼を見て、あれこれ想像を逞しくしているんだ」と斎藤氏はグラスにウォッカを入れて美子の前においた。

社の仲間と焼酎で鍛えているから美子はウォッカぐらい大丈夫だと思っていた。しかし口にくくと、口あたりはいいが、相当、強烈であることがわかった。

女だてらに見苦しい恰好はできない。今夜はシトヤカな線できこうと自分に言いきかせた。

「行長はね、切支丹で大陸和平論者だったから、主人の秀吉の宗教政策や、朝鮮侵略には納得できなかったんだ。しかし彼は表向きにはそれに反対しなかった。反対する勇氣も力もなかったからね。しかし裏では秀吉をあざむいて切支丹を保護したり、朝鮮に出陣しても戦うとみせて、ひそかに和を画策しているんだな。ぼくはそういう行長の面従腹背の生きかたに興味を持ってね……」

もう既にかなり出来あがっているのか、斎藤氏はこちらの気持を無視して、小西行長の話ばかりしている。

初 秋

しかし美子のような現代っ子には秀吉も行長も一万円札の福沢先生とおなじように、遠い、過去の儼げんのはえた人間にしか見えない。

行長がどういらい人であれ、それよりも彼女には現実には現実に眼前にいるその子孫のほうに関心がいく。

「どんなお仕事をなさっているのですか」

とたずねると、無口で微笑だけ頬にたたえている小西にかわって斎藤氏が、

「それが、この男、慶応からアメリカの大学まで行っているくせに、次々と会社勤めをやめてね、今は小さいながら一國一城の主あまじになっている。杉の森林でこれまで棄てていた樹を買ってそれを加工して売り出しているんだ。意外と自然ブームにのって儲けているらしいよ」

小西はただ微笑しているだけで何も答えなかった。

ちよっと素敵な人だな、と美子は思った。

二時間ほど斎藤氏の饒舌をきかされた。が、ウオッカが体をやわらかく暖めてくれ、気持ちいい酔い心地にさせてくれたし、小西が斎藤氏の聴き役になってくれたから、たのしかった。

ふと気がついて腕時計をみると、もう十時をすぎている。

「先生、そろそろ、失礼しなくちゃ」

「冗談じゃないよ。まだ宵の口じゃないか」

斎藤氏は淋しがり屋らしく二人の客が帰るのを引きとめようとする。

「でも……、明日、早く東京に戻らなくちゃならないんです。お原稿を頂戴できますか」
やっと、なだめすかして肝心の原稿をもらうと、タクシーをよんでもらおうとした。

「じゃ、ぼくも便乗させて頂いていいですか。ぼくもあなたと同じ万平ホテルに今夜、泊るのですよ」

と小西が声をかけた。

「ここでお酒を飲まされと思って、実は車をホテルにおいてきたんです」

「どうぞ……」

美子は少しうれしい気持でうなずくと、

「いいねえ、君たちは。二人で万平ホテルに戻るのか、俺は一人ここにとり残されて、わびしい酒を飲むのさ」

斎藤氏は駄々っ子のように頬をふくらませた。

十分ほどするとタクシーの到着した音がきこえた。

霧がひどい。

「先生、有難うございました」

「原稿をなくすなよ。名作なんだから」

小西と乗りこんだタクシーはまるで霧のなかを両手でかきわけるように走っていく。

「先生はかなり御機嫌よかったですね」

と小西が少し開いていた車の窓をしめながら言った。

「ええ。わたくしは先生の御別荘にうかがったのは初めてです。小西さんは先生と随分、お親しいのですか」

「絵仲間とでも言いましょうか。それに先生は私の祖先の伝記を書きたいと、おっしゃいます、色々、おたずねになるもんですから」

「小西行長の御直系でいらっしやいますの」

「いや、ぼくは小西行長の娘の子孫なのです。御存知かどうか知りませんが、行長の娘のたえは対馬の領主だった宗義智に嫁ぎまして……それがぼくの祖先になるのです」

「まあ」

と美子は首をかしげ、

「じゃ、小西家の御子孫というよりは宗家の……」

「いや、それが違うのです。宗義智は義理の父親である小西行長と朝鮮では共に手をくんで戦いましたが……あの関ヶ原の戦いの時には敵味方に別れたのです。それで彼は妻のたえと離婚しました。いいや、離婚せざるをえなかったわけです」

歴史に弱い美子は何だか、こういう複雑な話には弱い。

「その頃の大名夫婦なんて、外見は立派でも実際はあわれなものだったようですね」

と小西は霧に包まれた落葉松林に眼をやりながら、

「若い宗義智も妻を愛しながら、重臣たちの強制で彼女と離婚せねばならなかったのです。彼としても家臣たちの将来を考えると、個人的感情だけで動けなかったのでしょう。宗という対馬領主の家を断絶させぬために心を鬼にして妻と別れたのでしょね」

「そんなの……嫌ですわ、わたくし」

と思わず美子は憤慨したような声をだした。現代っ子の彼女には家の存続のために愛しあった男女が別れるなど、とても考えられぬ話だった。

あまりに子供っぽい声をだした美子に小西は笑いだして、

「あなたが怒っても当時はそういう時代だったのですよ」

「むごいわ。それでその二人はそのまま別々に生きたのですか」

「ええ……でも彼等がその後、とりかわした手紙が二通、わが家の古文書のなかに残っています。一通は妻のたえのもので、別れた夫の健康をまだ案じて、対馬の海風はいかばかり冷しと思